

子の心親知らず



遠藤徹郎

正月の二日、女子の前厄除けの同級会に招待された。男女七十人ほど集うちから、突然、小柄なA子がバッタのごとくとびついて足をバタバタさせながら、「小学生のころ、よくこうして先生にぶらさがったの。私誰だかわかる」と、なつかしそうに話しかけてきた。もう十九年も前の教え子である。あのころの無邪気さをひとつも失っていない彼女は三十一歳、聞けば三児の母親である。

その彼女の子育て論はただひとつ、がんばっている時は「それもう一息」と、かけ声をかけてやり、よくがんばった時には精一杯抱きしめてやつて、家族みんなでほめ合うことだという。彼女の顔からこぼれんばかりの笑みを見て、ほのぼのとした日々の家庭生活

が想像され、この彼女がよくぞここまで、思わずこみ上げてくるものをかみしめた。

最近特に家庭内暴力、校内暴力、登校拒否そして性非行、更に神経症、心身症、自殺から子殺しといった活字が痛いほどに目につく。今やまさに子供受難の時である。その原因として、過保護、過干渉、放任、父親不在など耳が痛くなるほど聞かされる言葉ばかりが上げられる。今や親にとっても、惨めなほどに育児姿勢を問われている時である。昔の親は一種の勘のようなもので立派に子供を育てたというが、今の親は、昔の親が身につけていたものの失つてしまつたのだろうか。否、核家族世帯で、年寄りから体験に基づいた育児論を聞く機会がないこと、隣

ある調査によると、半数以上の母親が「家庭の中心は子供」とし、「家庭で子供の人格を認めている」のは七割程度、子供の家庭教育に関する勉強は七割が「特にしていない」という結果になったという。また、別の調査では家庭内のコミュニケーションについて、「やや不満」「不満」と答えた中学生の上げた理由として、「親の一方的な押ししつけが多い」が群を抜いて多かつたという。これでは「親の心、子知らず」ではなく、「子の心、親知らず」ではないか。それをじっと耐えている子供の姿が目に浮かんできて、何ともかわいそうな気持ちになつてくる。

A子は、「私の心中にやすらぎができると、おかしいことに子供の態度

近所の付き合いが少なくなつて、生きた情報交換ができにくいくこと、更に親自身の兄弟数が少なくて、弟や妹と一緒に遊んだ経験がないこと、勉強重視で、親自身が子供のころ十分に遊んでいないこと……などの要因がストレートに子供に影響を与えているのではないか。いだらうか。

現代の子のイメージは、親の子育ての勘を狂わせ、自信を喪失させ、親子の断絶を生んだようと思う。子供の本質はいつの時代も変わるものではないと思う。子供の成長発達の過程には原則として一定のルールがあるはずである。子供の本質、ルールにそつて、親の在り方を考えたいものだ。

今の親にとって学習する機会はあるても、その学習したことと子育ての中に生かし理想的な子供を育てる余裕まであるのだろうか。実際はどんな子供に育てようとするのかさえつかめないまま子育てしている親が大半ではないだろうか。

何もできない自分が恥ずかしいので子供に塾通いさせているというK子、たくましい子供にするため三歳になつたら親子で剣道を始めるというY男、子供の好きなことを存分にさせたいが大学だけは、出してやりたいというT男、素直な子供に育つてくれるだけいいというM子……みんな子育ての方針は持つている。ただ、「子の心、親知らず」式の子育てにならぬよう願いたいものである。

社会教育に携わり二年、久しうに会つた教え子たちとの語らいもいつか愚痴めいた説教になつていく。これはいかん。教師づらはいかん。思いながらも、いつしか酔いが心地よく体中に広がつてきた。別れることはつらいけど……今夜も星が降るようだ……。